書評

松原朗編『杜甫と玄宗皇帝の時代』

（勉誠出版，2018 年）

鄭　　月　超

杜甫（712-770）、言うまでもなく、中国文学の最高峰を飾る大詩人である。北宋を代表する文人、蘇軾（1037-1101）及び王安石（1021-1086）は次のように杜甫の文学を称賛する。

> 李太白、杜子美 英瑋絶世の姿を以て、百代を淩跨す[1)]。
>
> （蘇軾「書黄子思詩集後」）

> 甫に至り、則ち悲懽窮泰、発斂抑揚、疾徐縱横、施して可ならざる無し。故に其の詩 平淡簡易の者 有り、綿麗精確の者 有り、厳重威武なること三軍の帥の若き者 有り、奮迅馳驟なること亶駕の馬の若き者 有り、淡泊閑静なること山谷隠士の若き者 有り、風流醞藉なること貴介公子の若き者 有り。蓋し 其の詩 緒 密にして思 深く、観る者 苟（まこと）に其の閫奥に臻る能わず、其の妙処を識ること易からず、夫れ豈に浅近なる者の能く窺う所ならんや。此れ甫の光 前人を掩いて、後来 継ぐもの無き所以なり[2)]。
>
> （「遯斎閑覧」に引く王安石の語）

蘇軾は、杜甫の文学を「百代を淩跨す」と称える。王安石は、杜詩の特質を述べた上で、「前人を掩いて、後来 継ぐる無」しと称賛する。こうした言説からも、宋代の早い時期から杜甫評価が文壇において確定したものであったことが窺われる[3)]。これ以降も異なる詩観が時代ごとに提示されてきたが、杜詩を中国詩の頂点とする論調は今日まで維持されている。

多くの杜甫に関する研究成果が残されている。日本国内だけを見渡しても、

枚挙に暇がない。人物像、詩の特質、または受容のあり方などというように多方面から論じられている。しかし、本書のタイトル『杜甫と玄宗皇帝の時代』が示すようなユニークな着眼点のもと書かれた本は、今まであまりなかったのではないだろうか。

杜甫の詩作を理解する上で、まず“詩史”という語が挙げられる。杜詩と“詩史”を結びつけた先蹤として、晩唐・孟棨『本事詩』「杜 禄山の難に逢い、隴蜀に流離す、畢(ことごと)く詩に陳(の)べ、見(あらわ)るるを推し隠(かく)るるに至り、殆んど遺事 無し、故に当時 号して詩史と為す[4]」が挙げられる。“詩史”―“詩”の形式で記録される“史”― “史”とは、『本事詩』に従えば、「禄山の難」を指す。すなわち、安史の乱（755-763）に遭い、混乱する国家、虐げられる人々を見つめ、寄り添い、その実情をあたかも史官のごとく“詩”に詠じたことが杜甫文学の特質の一つなのである。

文学史の観点からみれば、明・胡震亨（1569-1645）が「時事を以て詩に入るは、杜少陵より始まる[5]」と述べるように、“詩”と“史”の融合を完成させた最初の詩人として位置付けられる。杜甫は、文学性の高い作品を残しただけではなく、中国文学の継承と発展の歴史を語る上でも、欠かせない重要な存在となっている。後世の人々は敬意を表して、杜甫のことを“詩聖”と呼ぶ。

安史の乱を避けて杜甫の文学を語ることは難しい。現存する杜詩の割合からもこのことが追認される。編年体で編まれた『杜詩詳注』に従えば、約九割の作品が安史の乱勃発後に詠まれているという。のちに述べるように、安史の乱が起こる前、杜甫は長年、都・長安で求職活動に専念していた。その時の杜甫文学は何よりもまず科挙に代表される求職試験を意識したものであったといえる。“詩史”への脱皮を促したのは、国家の存続を揺るがした安史の乱に他ならない。

杜甫はちょうど玄宗皇帝の治世が始まる年に生まれている。安史の乱が勃発するまで約44年間、玄宗皇帝による太平な世を享受した。しかし、杜甫の文学はその後わずか数年続く安史の乱により深く結びつく。「杜工部の沈鬱」という語があるように、杜詩からは華やいだ玄宗皇帝による“開元の治”が抜け落ち、遺された作品から喚起されるのは玄宗皇帝とは異なる世界である。

『杜甫と玄宗皇帝の時代』というタイトルのもと編集された本書は、杜甫研

究においてふり返られることの少ない、あるいはいささか杜甫のイメージとは隔たりを感じる玄宗皇帝時代に主眼を置き、その時代での杜甫の活動を多方面から集中的に論じた一冊となっている。“詩史”“詩聖”として完成する前の杜甫、杜詩に焦点が当てられているのである。

六部構成である。章立て、著者及び著者の専門を以下に掲げる。

序説●〈松原　朗・中国中世詩〉

総論●杜甫とその時代―安史の乱を中心として〈後藤　秋正・唐代文学〉

Ⅰ　**●杜甫が生まれた洛陽の都**

武則天の洛陽、玄宗の長安〈妹尾　達彦・東アジア比較都市史〉

杜甫と祖父杜審言〈松原　朗〉

杜甫の見た龍門石窟〈肥田　路美・中国仏教美術史〉

Ⅱ　**●玄宗の時代を飾る大輪の名花＝楊貴妃**

武韋の禍―楊貴妃への序曲〈金子　修一・中国古代史〉

楊貴妃という人物〈竹村　則行・中国古典文学〉

楊貴妃を描いた文学〈竹村　則行〉

「麗人行」と「哀江頭」―楊貴妃一族への揶揄と貴妃不在の曲江池〈諸田　龍美・唐代文学、中国古典詩〉

Ⅲ　**●唐の対外政策（唐の国際性）**

漠北の異民族―突厥・ウィグル・ソグド人〈石見　清裕・中国隋唐史、唐代国際関係史〉

蕃将たちの活躍―高仙芝・哥舒翰・安禄山・安思順・李光弼〈森部　豊・唐・五代史、東ユーラシア史〉

辺塞詩の詩人たち―岑参を中心に〈高芝　麻子・中国古典詩歌〉

杜甫「兵車行」〈遠藤　星希・唐代文学〉

Ⅳ　**●杜甫の出仕と官歴**

詩人たちの就職活動―科挙・恩蔭・献賦出身〈紺野　達也・唐代文学、琉球漢文学〉

杜甫の就職運動と任官〈樋口　泰裕・南北朝文学、目録学〉

Ⅴ　**●杜甫の文学**―伝統と革新

杜甫と『文選』〈大橋　賢一・唐代文学〉

李白との比較―「詩聖と詩仙」「杜甫と李白の韻律」

〈市川　桃子・中国古典文学、日本漢詩〉

杜甫の社会批判詩と風諭詩への道〈谷口　真由実・中国古典詩〉

Ⅵ　**●杜甫の交遊**

李白〈市川　桃子〉

高適・岑参・元結〈加藤　敏・唐代文学（詩文）〉

前半三章、すなわち「杜甫が生まれた洛陽の都」「玄宗の時代を飾る大輪の名花＝楊貴妃」「唐の対外政策（唐の国際性）」は、杜甫が主に活動した二大都市、洛陽と長安に焦点を当てたものである。後半三章、すなわち「杜甫の出仕と官歴」「杜甫の文学―伝統と革新」「杜甫の交遊」は、杜甫の生活及び文学を中心に取り上げている。

特筆すべきは（「序説」にも言及されているように）、文学、歴史、思想、美術といった分野の異なる専門家が等しく、『杜甫と玄宗皇帝の時代』をテーマとして寄稿している点である。異なる視角を共存させることで、本書は一つの着地点に向かって収束することはなく、結論が読者に開放された状態で完結する。読書行為は単なる“読む”から、“いかに読めるか”という手続きを踏むことになる。

試みに、本書に収められている論文を紹介しつつ、読書行為を通して獲得したわたしなりの結論を以下に組み立ててみることとする。盛唐が誇る中国最大の詩人・杜甫に専ら関心を置き、“詩史”を完成させる前の、玄宗皇帝時代における杜甫の様相を、本書の情報に基づき、構築していこうということである。“詩聖”としてイメージされる杜甫とはいささか異なる杜甫像が浮かび上がってくるように思う。

杜甫は、杜審言（645-708）の孫として洛陽に生まれる。更にその遠祖に、『春秋佐氏伝』の注釈者として知られる杜預（222-285）がいる。祖父の杜審言は、李嶠、崔融、蘇味道とともに“文章四友”と称され、詩作においては宋之問、沈佺期と名を等しくし、五言詩の基礎を整えた一人とされる。杜甫という大詩人の誕生に、祖父・杜審言を抜きにして語れない。

第Ⅰ章第二篇「杜甫と祖父杜審言」では、杜甫の出自が詳細に紹介されている。杜甫は「蜀僧の閭丘師兄に贈る」の中で、「吾が祖 詩 古に冠たり」と詠み、次子・杜宗武（753-？）に宛てた「宗武の生日」では、「詩 是れ吾が家の事」と詠む。更にいえば、39歳のときに献上した「鵰の賦」の中で、自らを祖父の正統なる後継者であると自認する。杜甫にとって詩作は、決して貴族の嗜みなどではない。祖父が修文館直学士（天下公認の一級文化人）として活躍したように、“詩”は杜甫にとって使命であり、家学として自負するものであった。

第Ⅲ章「詩人たちの就職活動」、「杜甫の就職活動と任官」では、盛唐における役人登用制度および、杜甫の就職活動あるいは求職活動について述べられている。洛陽に生まれた杜甫は上京し、長きにわたり都・長安での求職に身を投じる。最初は科挙（遅くとも735年）、次に制科（本論文の説に従えば751年までのいずれかの回）、最後に三度の献賦（それぞれ750年、751年、753年）を経て、起家する。751年に献上した「鵰の賦」が幸運にも玄宗皇帝の目に止まり、召し出される。更に追加試験を受け、合格となる。ここまで二十年あまりの歳月を費やしている。しかし、『通典』巻十五「其の進士は、大抵 千人に第を得る者、百に一、二」からも窺われるように、求職競争は熾烈を極めるものである。日の目を見ることのなかった大多数の受験者と比べれば、最終的に合格までこぎつけ、授官したところをみると、実力、人脈、運ともに総じていえば、恵まれていたようにも見受けられる。合格後、杜甫は守選期間を経て、755年に右衛率府兵曹参軍を授かる。奇しくも安史の乱が勃発する前夜であった。

玄宗皇帝時代の杜甫は勉学に勤しむ傍ら、授官まで各地を遊歴し、有力者、文人たちと交流を深めている。時系列に沿っていくつかピックアップしよう。

14、5歳のとき、文人の仲間入りをする。洛陽で文壇デビューし、崔尚や魏啓心の称賛を受ける。上京したあと、玄宗皇帝の甥である汝陽王・李璡をはじめ、多くの有力者の知遇を受ける（「杜甫とその時代―安史の乱を中心として」）。

33歳のとき、李白と洛陽で出会う。都での生活を捨て、隠逸に赴こうとする李白である。この年の秋、李白と再度梁・宋に会い、辺塞詩人として知られる高適も仲間に加わり、三人で旧跡を訪ね歩く。とりわけ李白の文才、生き方に強く惹かれ、以降、李白に向けた作品を晩年までたびたび作っている（「辺塞

詩の詩人たち」「李白」「高適・岑参・元結」)。

38歳から40歳にかけて、「兵車行」を詠む。杜甫の代表作の一つとなる。のちの杜詩に現れた風諭性の萌芽が見てとられる(「杜甫『兵車行』」「杜甫の社会批判詩と風諭詩への道」)。

42歳のとき、長安の曲江池で、楊貴妃一族の豪遊を目撃し、「麗人行」を作る。ここでは、舌鋒の鋭さが息をひそめる(「『麗人行』と『哀江頭』―楊貴妃一族への揶揄と貴妃不在の曲江池」)。

44歳のとき、奉先県に戻る途中、華清宮で開かれた皇帝と楊貴妃一族の宴を目の当たりにする。一方で、家族の元に到着してみると自身の幼い愛娘が餓死していたのである。自らが社会の犠牲者であるという現実に直面した悲痛な瞬間であろう。「京より奉先県に赴く詠懐五百字」を作る。詩の後半に見える社会を痛烈に風刺した二句「朱門には酒肉 臭し、路には凍死の骨あり」は、千古の絶唱となる。この直後に安史の乱が勃発する(「『麗人行』と『哀江頭』―楊貴妃一族への揶揄と貴妃不在の曲江池」)。

杜甫は、杜審言の孫として生まれ、壮年、朝廷に仕えることに価値を置き、励んでいた。二十年という長きにわたり、任官試験に挑んだことがそれを物語っていよう。前期の杜甫の作品からは社会の不条理、矛盾を詠出することに躊躇いが感じられるのは、あるいは杜家の一員として生まれた限界なのかもしれない。愛娘の死、そして安史の乱による究極の絶望を経験することで、杜甫の作詩行為は限界を突破し、“詩史”として完成したように思われる。

本書を読み終えて、一つのことわざが思い浮かぶ。「時勢造英雄」である。自身の不幸、国家の不幸に遭遇し、それを記録として詩に昇華させ、完成した作品は“詩史”として後世の文学に大きな影響を与えていくこととなる。もちろん、詩の詠出は「語 人を驚さずんば死して休まず」と自らが詠んだように、杜甫自身の努力と才覚によるものである。同時に、“時勢”もまた不可欠である。杜甫はよく“偉大”という言葉が冠せられる。杜甫の偉大さを炙りだしたのは、まさに安史の乱という“時勢”であろう。ただ、忘れてならないのは、玄宗皇帝という盛世を前提とした変局によって完成された“詩史”なのである。

本書「序説」の最後に「杜甫の全貌をコンパクトに、しかも文学・歴史・思想・美術の多面的視点からまとめたハンドブックとなればよいと願っている」とあ

るが、本書の特質はまさにこの一言に尽きるように思われる。“詩聖”として完成する前の、支配と被支配の狭間を絶妙な均衡で生きる杜甫の姿が、この本によって新たに改めて提示されたように思われる。

なお、本書の続編として「杜甫と安禄山の乱」（仮称）が出版予定とのことである。

注

1）李太白、杜子美以英瑋絶世之姿、淩跨百代。『東坡全集』巻93。

2）至於甫、則悲懽窮泰、發斂抑揚、疾徐縱横、無施不可。故其詩有平淡簡易者、有綿麗精確者、有嚴重威武若三軍之帥者、有奮迅馳驟若叀駕之馬者、有淡泊閑靜若山谷隱士者、有風流醞藉若貴介公子者。蓋其詩緒密而思深、觀者苟不能臻其閫奥、未易識其妙處、夫豈淺近者所能窺哉。此甫所以光掩前人、而後來無繼也。『苕溪漁隱叢話』前集巻６。

3）蘇軾、王安石より前に、中唐・韓愈（768-824）、白居易（772-846）、元稹（779-831）などが既に杜甫の詩作に注目し、名声の高かった李白と並べ称えている。しかし、こうした言説が文壇の主流を占めるのは北宋に入ってからである。

4）杜逢祿山之難、流離隴蜀、畢陳於詩、推見至隱、殆無遺事、故當時號為詩史。『本事詩』高逸篇。

5）以時事入詩、自杜少陵始。『唐音癸籤』巻26。